

# 信に関する一考察

—方便品における—

望 月 海 淑

1

信は *śraddha* の訳語であるが、信という時、我々は信心・信仰というような言葉を想起するのが常であるが、法華經について信を考える時、想起する言葉は一念信解であろう。

しかし、一念信解は *eka cittotpādikāpy adhimuktir utpāditā bhīśraddhanata* の訳文であるから、信解にあてはまるものは、*adhimukti* と *abhisraddha* の二つの言葉であることがわかる。このうち *abhisraddha* は *śraddha* と同じで信と訳されるものであるが、*adhimukti* は解と訳されるものであり、信解と訳されるものでもある。この二つの言葉を使った文章をもって、羅什が一念信解と訳したのであるがその後、一念信解が一つの熟語になっているのに、梵文ではそのような熟語的ではなかったことを示しているであろう。

法華經の説示では、如来寿量の教えを聞いて一念信解をする時に、その人が得る功德は、五波羅蜜を多年に亘って修行する功德の百千万億倍する無量のものであるとなさされているが、これについて、天台智顛は、一念信解という

は、所聞の処に随つて豁爾として開明し、語に随つて入りて罣礙すること有ること無く、一切法は皆是れ仏法なりと信ずるなりとなし、疑い無きを信といい、明了なるを解という、是れを一念信解の心となすなりと、<sup>②</sup>解釈している。疑いなきが信で、明了なるが解であるというも、その心は、一切法は皆是れ仏法なり、と信ずることにあると思われ。

何故なら、如来寿量が説かれるために、仏乗の開顯、多宝如来の証明と二仏並座、上行菩薩の出現等々、法華経は実に綿密な展開をしたのであり、それらが混然一体となって如来寿量を説示し、久遠の本仏を開顯したのであった。そして、本仏の中に生かされている我々としては、本仏の實在を信ずる道以外に方法は残されていないと思われるからである。

しかし、このように法華経をとらえたとしても、*śraddhā* と *adhimukti* とを全同のように考え得るものであるかどうか、信が如来寿量の説示において初めて生きて来るものなのかどうか、という細かな疑いの残るところではある。そこで、信がどのような場面において使用されたものであったか、という基礎的な問題をとりあげようとしたのが本稿である。

## 2

方便品は釈尊と舍利弗との間の三止三請の後、釈尊が教えを説こうという心を動かされた時、五千人の増上慢の人々が法座より立ち上って去って行ったことを記している。有名な五千起去であるが、この人々について、次のような説明を加えている。

比並罪根深重、及増上慢、未得謂得、未証謂証、有如此失。<sup>③</sup>

この文の未得謂得未証謂証は、より優れたもの・仏乗或はそれに近いものをすでに得た、すでに証ったと考えることであり、それは罪根深重なるが故にそうなってしまった、というのであるが、梵文でも同じようである。

yatāpādam abhimanākusāla mūlenāpṛāpte prāpta samjīno 'nadhigate 'dhigata samjīnah — <sup>④</sup>

(増上慢の不幸な根の彼等は得ていないものを得たと思ひ。達成しないものを達成したと思つていたからである。) そして、この五千人のことを、自惚れの心を起したものだとし、自惚れの心があるから自尊心を傷つけられたと思つたのだ、との説明をも加えている。この出来ごとの後の残つた人々に対する釈尊の言葉は

我今此衆、無復枝葉、純有貞実、舍利弗、如是増上慢人、退亦佳<sup>⑤</sup>であるが、梵文になると更に厳しい言葉がのべられている。

nispalāvā me śāriputra parśad apagata phalgūṅ śradhā sāre pratīṣṭitā — sādhu śāriputra iteṣāṃ  
ābhimanīkanāmato 'pakramanaṃ — <sup>⑥</sup>

(舍利弗よ、私の会集には不用な者、無益な者は去つていった。すべて信の心において定住していた。舍利弗よこれら増上慢に属する者が出て行ったことはよいことだ。)

尚、この五千人に対する正法華経は、至懐甚慢であり、未得得想未成謂成とし、衆会群易有竊去者、離广大誼声味所拘、又舍利弗、斯其慢者退亦佳矣。<sup>⑦</sup>となつてゐる。

ここに出て来る abhimanika, abhizna は abhi-yman からつくられた言葉であり、自分自身のことのみを考え、という意味あいをもっている。自惚れと訳されるのはそのためであり、自惚れの心は慢心につながって行くので、

増上慢と漢訳されることにもなる。

五千人の比丘たちが、退座したのはよいことだという時、それは慢心をもっていたがためであったといえよう。慢心は自己中心のものの見方をするためであるが、この場面で、<sup>⑧</sup> 釈尊によって最も拒否されたものは慢心であった。そこで、*śraddha sare pratisñita* という信とは、慢心に対する立場におかれているといえよう。したがって、それは自己の考えをかなぐり捨てた素直なものでなければならぬ。

### 3

この辺のことを、更に明白にするためには、方便品をもう一度、仔細に読んでみるのが肝要であろう。

五千起去のおこるすぐ前、そこには釈尊と舍利弗の間の三止三請が行なわれているが、そこでは唯願説之、唯願説之、として……

聞ニ仏所説ニ則能敬信<sup>⑨</sup>

と、舍利弗が釈尊に説示を懇請している。これに対する梵文は、

*bhāsatañ bhagavān bhāsatañ sugata etam evārtham* । ……*yāni bhagavato bhāsitān śraddhāsya-*  
*nti pratyisyanty udgrahisyanti* 二<sup>⑩</sup>

(世尊よ、説いて下さい。善迦よ、このような意義を説いて下さい。……世尊が説いたものを信じ、到達し、会得するでありますよ。)

であり、妙法華経が敬心と訳したものが、

√'śradh prativ'i, udiv'grah 〇三〇の意をもっていたことが示されている。正法華経は  
悉当<sup>11</sup>信樂、受持奉行、

と訳しているのも、そのためであろうと思われる。ちなみに上記の長行に対する偈では

妙……是会無量衆 有<sup>12</sup>能敬信者、

梵……śraddhāḥ prasannāḥ sugate sagaurava jhāsyanti ye dharmam udāhṛtaḥ te<sup>13</sup>

(彼等は善逝を淨心に敬心に信じ、ダルマの説示を理解するであらう。)

正……恭肅安住 欽信懇誼 斯之等類 必皆欣樂<sup>14</sup>

となっており、妙法華経の敬信にあたるものが、梵文と正法華経ではもっと詳細に説示していることがわかる。このように妙法華経が意識をなしていることは、舍利弗の懇請に対する釈尊の、止めよ、と止める言葉の偈文に明白である。

諸増上慢者 聞必不<sup>12</sup>敬信、

に対する梵文と正法華はそれぞれ、

abhināna prāptā bahū santi bālā nirdiṣṭa dharmasmi kṣīpe ajānakāḥ<sup>15</sup>

(増上慢を生じた沢山な愚か者があり、説かれたダルマを無知者は捨てる)

仮使吾説 易得之誼 愚癡闇塞 至懷慢恣<sup>16</sup>

であって、妙法華経の不敬信にあたる直接の言葉は見あたらない。

しかし、二度目の懇請についての長行の偈文は次のようである。

妙(長) …如是人等必能敬信<sup>⑫</sup>

kern (長) …tāni bhagavato bhāṣitam śraddhāsyanti pratyisyanty udgrahisyanti<sup>⑬</sup>

正(長) …聞者則信<sup>⑭</sup>

妙(偈) …能敬信此法<sup>⑮</sup>

kern (偈) …ye śraddadhāsyanti te dharma bhāṣitam<sup>⑯</sup>

正(偈) …悉信信樂<sup>⑰</sup>

すなわち、長行の部分における妙法華經と梵文の表現は、第一度目の懇請の場面と同じであるが、正法華經は信の一字で表現して簡潔になっており、偈文になると、梵文も信にあたる śraddha の一字によって簡潔に表現されている。恐らく信じ、到達し、会得すると云ったところまで、それは信の一事を詳細しようとしたにすぎなかったからではなからうか。もしもこれが認容されるとするならば、そこでは常に信の一字をもって基調とした羅什の達意の見事さに、再び敬意を払わなければならないことを確認することになる。

4

そして、五千人の起去が終った時、釈尊は残った人々にむかって次のように語っている。

妙…舍利弗。汝等当信仏之所説言不虛妄<sup>⑱</sup>。

梵…śraddadhāta me śariputra bhūta mādy aham asmi tathā mādy aham asmy anaryathā mādy

aham asmi<sup>⑲</sup>

(舍利弗よ、私を信ぜよ。私は真実を語るものであり、私はありのままに語るものであり、私は変らざるものを語るものである)

正：爾等当信如来誠諦所説深經。誼甚微妙言輒無虚。<sup>20</sup>

ここでは、仏は虚妄を説くものではないので、仏のことをただ信ぜよ、と信の一字をもって、大衆にむかって念を押されている。真実を語り、ありのままに語り、変らざるものを語るとは、諸法実相の根本理念のままを語ること以外ならない。諸法実相のままを語るものであるならば、大衆としてはその釈尊の言葉を、ありのままに信ずるといふことだけが、真実なるものへの直参の道であるといえよう。その証拠に、釈尊はこのような念を押された上で、一仏乘を開顕せられた。一仏乗の世界においては、素直に信ずる道だけが生きる道であるからである。

それ故、釈尊は舍利弗にむかって次のように語っている。

妙：若有比丘実得阿羅漢、若不信此法、無有是处。<sup>21</sup>

梵：asthānam etac chāripuṭrānavakāso yad bhiksū arhan kṣināsvaṇ samukhibhūte tathāgata  
imam dharmam śrutvā na śradaddhyāt

(舍利弗よ、煩惱を尽した阿羅漢の比丘らが、如来の面前でこのダルマを聞いて信じないということは不要であり、あり得ない。)

正：諸比丘為羅漢者、無所志求、諸漏已尽、聞斯經典而不信樂。

信じないということは、あり得ないというのは、信ずるといふ道しかないことを明白にもの語っているであろう。それ故、方便品の長行の末では、釈尊は更に、信ずることを強く念を押しておられる。

汝等當一心信解受持仏語<sup>21</sup>、

詳しくは仏語を信解し受持することが大切である、というのであるが、この妙法華經に對して、梵文法華經には、

innesu buddha dharmesu śraddadhādhvam me śāriputra patiyatāvakaipavata<sup>22</sup>

(この仏陀のダルマを信ぜよ。舍利弗よ、私を信ぜよ、信賴せよ)

とのべられている。注意すべきことは、妙法華經が一心信解とのべた件を、梵文では、信ぜよ、信ぜよ、信賴せよとくり返しのべていることである。正確にはこのくり返しの言葉は三種のちがった言葉で語りかけられているのであるが、それにしても、釈尊が自分の言葉は同時に諸仏の言葉であり、真実の言葉であるから、先づもって信ずることが肝要であると、大変なまでの心をここに集中していることを知ることが出来る。そしてここだけ尚、正法華經の文は

當篤信如来言<sup>25</sup>

であり、篤信と訳されている。梵文において信ぜよとくり返すそのあり方に意をもちいた故が、妙法華經をして一心信解と訳させ、ここでは信解の訳語を用いさせ、正法華經をして篤信と訳させたのであろうと思われる。

方便品の最後の偈においても、幾つかの信に関する説示を見出すことが出来る。便宜上、それらを例記すると次のようである。

妙：優婆塞我優 優婆夷不信<sup>26</sup>

梵：upāsikās ca aśraddhāḥ sahasrāḥ pañcanūnakāḥ<sup>27</sup>

(信なき優婆夷は五千人より少なくなかった)



正…五千人不信<sup>28)</sup>

これは五千起去の人々が増上慢で信仰の念のなかったことを語る件であるが、*a-sraddha* は信の正反対であるから、増上慢という自惚れの心は信と相反するものであることを示しているとも思われる。

妙…少智樂二小法一 不三自信二作一仏一<sup>29)</sup>

梵…*hinādhimukta hi avidyasu nara bhavisyatha buddha na sraddadheyuṅ*<sup>30)</sup>

(実に劣った解脱の無智な人々に汝等は仏陀となるであらうとしても決して信じないだろう)

正…下劣不肖 志懷羸弱 觀諸仏興 卒不肯信<sup>31)</sup>

これは釈尊が、一仏乘を分別して三乗があるかのよう<sup>32)</sup>に説いて見せた理由を説明した箇所<sup>33)</sup>の偈である。

妙…(舍利弗当知) 鈍根小智人 著相憍慢者 不能信三是法一<sup>32)</sup>

梵…*duḥśraddadhān etu bhavisyats 'dya nimitta samjñinḥa bala buddhinam*

*adhimāna prāptāna avidyasūnām ime*<sup>33)</sup>

(今、動機が小さく、愚かな悟りで、増上慢で、小智に達した者は信じないが…)

正…少有信心 憍慢自大 不レ肯三啓受二<sup>34)</sup>

一仏乘は最初から説いたら信じられがたいことで、釈尊の最高の悟りも菩薩以外には信じられ難いものであることを説いた偈であるが、信じられ難い理由は鈍根小智で、著相憍慢であるからで、いいかえれば増上慢な心があること<sup>35)</sup>に由来していることを示すといえよう。

以上、方便品における信 *śraddhā* についての場面を見て来たのであるが、妙法華經に關する限り、尚、二・三の場面を見ることが出来る。それはこの品の最後の偈に見られるものであるが、次のようである。

若人信<sub>二</sub>帰<sub>一</sub>仏<sub>一</sub> 如来不<sub>二</sub>欺<sub>一</sub>誑<sub>一</sub> <sup>35</sup>

衆生没<sub>二</sub>在<sub>一</sub>苦<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>是<sub>一</sub>法<sub>一</sub> 破<sub>レ</sub>法<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>信<sub>一</sub>故 墜<sub>二</sub>於<sub>一</sub>三<sub>レ</sub>惡<sub>一</sub>道<sub>一</sub> <sup>36</sup>

当<sub>レ</sub>來世<sub>二</sub>惡<sub>一</sub>人 聞<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>說<sub>二</sub>一<sub>一</sub>乘<sub>一</sub> 迷<sub>二</sub>惑<sub>一</sub>不<sub>二</sub>信<sub>一</sub>受<sub>一</sub> 破<sub>レ</sub>法<sub>二</sub>墮<sub>一</sub>三<sub>レ</sub>惡<sub>一</sub>道<sub>一</sub> <sup>37</sup>

これらについての梵文法華經を見ると、最初の若人信帰仏に該当すると思われるものは全くなく、<sup>38</sup> 次の不能信是法 破法不信故の文に該当すると思われるものは、

*te mahya dharmam kṣipi bala dhāṣṭān kṣipitva gaocheyur apāyabhamin* <sup>39</sup>

(愚かな彼等は私のダルマを捨て、言葉捨て、邪惡な大地に行くだろう)

であり、不能信、不信にあてはまる表現はとられてはいない。しかし、ダルマを捨て、言葉捨てるということは信じないことを意味するし、不信なる者は仏への道から遠ざかるものであるから、邪惡な大地―三惡道におちるべきものであろう。妙法華經の文章が、このような点をふまえた上での意識であるとするならば、信こそが仏への道として理解していることを物語るのではなからうか。

第三番目の迷惑不信受に該当すると思われるものは、

*anāgate 'dhvāmi bhrameyur satvāḥ sūtrān kṣipitvā narakān vrateyuh* <sup>40</sup>

(未來において、衆生らは道をさまよひ、經典を捨てて、地獄におちるであろう)

となっており、不信受とはなっていない。しかし、經典を捨てるということは信を持たないことであり、道をさ

まようことに外ならないから、不信受と意識をなしたものであらうと思われるが、不信受こそは地獄におちること決定の道であることは論を待たないところであらう。

そして、もう一例はこれらと逆であり、妙法華経には信の訳語はないが、梵文法華経には

ye śraddadhasyanti tava ita dharmam <sup>41)</sup>

(あなたのダルマを信ずるであります)

とあって、śraddha の語が使われているところがある。これに該当すると思われる妙法華経の訳文は、欲聴受仏語であり、正法華経は心当欽染 於斯法誼となつてゐる。仏語を聴受するということは、信ずることの一つのあらわれであらうし、斯の法において欽染すとは、信ずるもののみにゆるされた喜びとなるであらう。これらは教えをうけたものの、釈尊に対する喜びと覚悟の申請であるから、ひたすら心の表白としてのべられたものであるといえよう。

更にもう二ヶ所、妙法華経で信力の語の使われているところがある。十如是のすぐ後に語られた偈の始めの方の

徐<sup>42)</sup>諸菩薩衆 信力堅固者<sup>43)</sup>

と、その偈の後の方の

於<sup>44)</sup>三仏所説法 当<sup>45)</sup>生三大力<sup>46)</sup>

であるが、これらに該当する梵文はそれぞれ次のようである。

anyatra bodhisattvebho adhimuktiya ye systhitāh <sup>47)</sup>

(信解に住しているものは菩薩たち以外にはない)

yan sariputro sugatah prabhāsate adhimukti sampanna bhavāhi tatra <sup>48)</sup>

(舍利弗よ、善逝が語るものに信解を具足せよ)

ここで妙法華経が信力と訳したものは、*śraddhā* ではなくて、*adhimukti* であることに注意をしなければならぬ。分別功德品の一念信解におけるものが、*adhimukti* と *śraddhā* とであったが、そこでは両者を合せて妙法華経は信解と訳出をしていた。ここでは *adhimukti* だけをもって信力と訳して、ただ信とは訳さなかった。そして今まで見て来たように、一つの例外を除いて *śraddhā* は常に信と訳出されていた。このへんのちがいは何故なのであるうか。

*śraddhā* は *śrad+dhā* の型をとるもので種々な漢訳がなされてはいるが、基調となるものは信・信仰であると思われる。そして、*adhimukti* は *adhi+muc* を基本とするもので、*muc* は解き放すという意を基調としていると思われる。解き放すというのは、種々の迷い、悩みから解放されることで、一般に解脱という型で考えられているもの基本である。したがって、この二つの言葉の間にはいささかちがったニュアンスがあるようにも思われる。しかし、法華経においては、仏語を信受する、能く敬信せば、信すべし、というような具合に、釈尊の教えを信受するということが、非常なまでの力点がおかれており、ここでは信はさとりと達するための唯一の方法として考えられる。一方、解脱は仏教の伝統的なさとりへ達するための道であった。そしてそれは、菩提樹下で禅定に入られた釈尊が開悟された事実が示すように、理智をとまなうものを本質としていると思われる。その点では、同じ覺りに達する道であるとしても、信が行動的であるのに対し、解脱は静止的である、といえるのかもしれない。

方便品のはじめの偈で、釈尊が舍利弗に信力堅固者といい、当生大信力という時、それらは *adhimukti* によって語られたものであることを指摘したが、この言葉を使った釈尊の心には、従来の伝統の上に立ったものの見方を、更

に動的なものに発展させようとしたものがあつたのではなからうか、とすら考えさせられる。

その理由は、舍利弗は釈尊の直弟子であつた。阿含仏教の代表的存在で、しかも智慧第一とさえ称せられた。阿含仏教は解脱を目指す仏教であつた。そこでこの箇所が法華經の特性を表現するところでもないこともあつて、*adhi-*  
*murka* を使うことによつて、覺りを求める人を表現しようとしたのではなからうか。

五千起去以後からは、不要な人、氣力のある人ばかりという、ひたすらに求め続けようという人々ばかりになつた、又、それらの人々だけが大切だということを強調したこともあつて、*śāddhā* が使用され出したのではなからうか。信を心に刻むことこそが法華經のそれ以後の命題を定めるに至る、一つの鍵として登場して来たように思われる。

〔註〕

① *Keṇ* || P 332 ~ 333。 妙 || 大正九44下。 正 || 大正9 116中。 尚、一念信解という妙法華經の熟語に対して梵文法華では

簡潔な熟語ではない。

② 大正34・137中下

③ 大正九・7上

④ *Keṇ*・38 ~ 39

⑤ 大正・九・7上

⑥ *Keṇ*・39

⑦ 大正九・69中

⑧ *Keṇ* 本 P. 38には次のように、五千人の比丘は自我を傷つけられたと思つた、とある。

*ta ātmānaḥ savraṇam jātvā taśāḥ parśado 'pakṛāntāḥ*

これについて、文句は「五濁障多名罪重、執レ小弱レ大名根深、未レ得謂レ得名ニ上慢、未レ得ニ三果ニ未レ証ニ無学ニ、有ニ如此失一者、謂ニ障執慢ニ三種之失一也。」(大正三十四48下)となし、義疏は「何故五千起去而三根住耶、是故釈云、五千罪根深重十方諸

仏不能拔濟、是故退廢、……未得小乘道果、謂得小乘道果、殺名爲失、……」(大正三十四・493中下)と等となし、  
 玄贊は「比去之所以者何謂也、今釈有二意、一罪根深重、二有増上覆、……」(大正三十四・708中、709中)

- ⑨ 大正九・6下
- ⑩ 大正九・36
- ⑪ 大正九・69上
- ⑫ 大正九・6下
- ⑬ 大正九・36
- ⑭ 大正九・69上
- ⑮ 大正九・37
- ⑯ 大正九・69中
- ⑰ 大正九・38
- ⑱ 大正九・7上
- ⑲ 大正九・39
- ⑳ 大正九・69中
- ㉑ 大正九・7下
- ㉒ 大正九・43
- ㉓ 大正九・69下
- ㉔ 大正九・44
- ㉕ 大正九・70上
- ㉖ 大正九・7下
- ㉗ 大正九・44
- ㉘ 大正九・70上
- ㉙ 大正九・9下
- ㉚ 大正九・56
- ㉛ 大正九・72中
- ㉜ 大正九・10上
- ㉝ 大正九・57

④	大正九	72
③	"	上
②	大正九	9
①	"	中
④	kern	47
③	kern	55
②	kern	58
①	kern	38
④	大正九	7
③	"	上
②	"	中
①	"	69
④	"	5
③	"	下
②	kern	6
①	kern	31
④	"	32

ucchīna pāpā nana sarva dharmās tenāsmi baddho jagatānpodhāt